平成元年10月5日

壊すと。未審、這箇は壊か不壊か。(愁人は愁人

に向って説くことなし。)隋云く、壊。(早にこれ

挙す、僧、大隋に問う、劫火洞然として大千俱に

(本則)

龍 参禅会会報 泉

院

# 従容録に学ぶ(九)

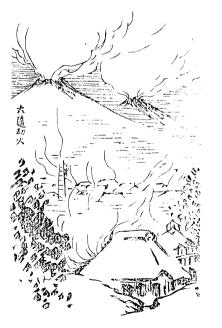
第三〇則 大隋劫火

〔示衆〕

は寸歩を離れず、太山はただ重きこと三斤のみ。 衆に示して云く、諸の対待を絶し、両頭を坐断す。 に道う。 しばらく道え、なんの令によってか、あえて恁麽

> 済云く、大千に同じきが為なり。(生鉄、鋳造す。) 云く、なんとしてか不壊。(また恁麽にし来る。) 云く、不壊。(契頭を打破し、鼻孔を捩転す。)僧 未審、這箇は壊か不壊か。(同病、相い憂う。) 済いがし しょし えんばん 僧、竜済に問う。劫火洞然として大千倶に壊すと。 い去く。(下坡に走らざれば、更に一推を与う。) い去くや。(目前にて験むべし。)隋云く、他に随 なんぞ堪えん。)僧云く、恁麽ならば則ち他に随 **輝門では大いに参究された公案の一つであり、『碧** なってしまうのか、という問題がテーマです。古来、 この則は、世界が壊れると、真理はいったいどう

厳集』にも第二九則に収められています。 大隋とは、唐代に四川省の大隋山で禅風をふるっ



紹修と承けます。 れ、法系は玄沙師備 指します。ふつうは修山主と呼ば 西省の竜済山に住した紹修和尚を は、唐末から五代ごろの人で、江 た、〔本則〕の後半にみえる竜済 丈さんの孫弟子に当る人です。ま 九)のことです。百丈懐海 大安-大隋法真と禅法を承け、 た名僧、法真和尚(八三四~九一 長慶 百

が禅の眼目であり、本来的な立場 た上で、 むろん、以下の〔本則〕をふまえ のだ、といったほどの意味です。 からは遠近も軽重もありはしない の対立や相対的な見方をやめるの まず、万松の〔示衆〕は、一切 自らの宗意をのべたもの

問答の一々に対して、万松が著語 か。」「全世界と同じものだからさ。」 問をしたところ、竜済の答えは そこで僧は竜済をたずねて同じ質 る。」僧「壊れる世界についていっ 世界がすっかり壊れるときには、 壊れないさ。」僧「どうしてです てしまうのですか。」「そうだ。」 這箇も壊れますか。」大隋「壊れ の火がゴウゴウと燃えさかり、 ある僧が大隋にたずねた。「終末 ただこれだけの問答です。この さて、〔本則〕をみましょう。

> が禅問答というものです。 仏法の道理が内在している。 応答にすぎません。ところが、こ の単純な応答の中に、大へん深い 著語をとりはずすと、実に単純な という寸評をつけているわけです。

ところで、ある時期が来ると世

小乗の『倶舎論』には「壊劫」と 西を問わず古くからあり、聖書に 界が壊れるという考えは、 景として、ある僧が大隋に対し、 ています。恐ろしいですね。 いう宇宙が破壊する時期が説かれ ドでもいわれています。仏教でも も説かれますし、また、古代イン そこで、こうした仏教思想を背 洋の東

世界が壊れる時は 這箇 」も壊れ



大隋が開悟した大潙山密印寺万仏殿

うことです。 れ」といった。つまり、真理とい は、言葉で表現できないから「こ ますか、と質問した。「這箇」と

わからなくなった。 てしまうのですか。」とたずね、 で「その壊れる世界についていっ ひどく面喰ったのでしょう。そこ から、そうした答えを予想したの そうだ」といわれて、 に、大隋に「壊れる」といわれて 永遠不変だと思われています。だ ふつう、真理は不生不滅であり、 ますます

理そのものではありませんか。 ろもろの現象によって構成され、 象を現出させている働きこそ、真 のです。そして、こうした世界現 ている現実の全世界の現象をいう さまざまに千変万化のさまを見せ 地や空気や山や川や草木など、も るという根本的な誤りを犯してい ることですね。大千世界とは、大 は、真理を大千世界と相対的にみ そうです。この僧のいけないの

あります。このように、世界が刻 また現象世界の真実相そのもので す。春に花が咲き蝶が舞う、秋の 川が洪水を起す、みな真理の法で 一刻と動いていることそのものが て噴火する、清らかなせせらぎの 月明りが飛ぶ雁の影を映す、これ 麗わしく雪を戴く山が突如とし

> 界の本質や働きを総摂したことば に過ぎないのですね。 真理ですから、所詮、 真理とは世

ずねて同じ質問をした。竜済の答 る僧は、かえって疑問をつのらせ えは「壊れはしないさ」。 しかし、相対観念にとらわれてい 面白いコメントをつけています。 て坂道を登ってしまい、竜済をた いので、ひとおししてやった」と こを万松は、「坂道を走りおりな うことを懇切に教えてあげた。そ る劫火こそ真理そのものだ、とい 界を焼き尽し壊してしまう洞然た さて、大隋は僧に対して、全世

と教えています。これはもう大隋 に「真理と世界は同じものなのさ 僧がわからなかったので、さいご た」のです。ところが、それでも を打破り、本分の方向に変えてやっ トの通り、竜済は僧の「分別悟り たのです。まさしく万松のコメン おそらく、竜済は大隋の言葉を知っ 意味で「不壊」といったのです。 も世界と共にあるという意味で た真理の絶対性を僧に教えてあげ ていました。だから、相対をこえ なったという事実が真理だという 宇宙がなくなろうとも、そのなく が、中味が違います。大隋は真理 壊」といったのですが、竜済は、 この答えは大隋とは正反対です

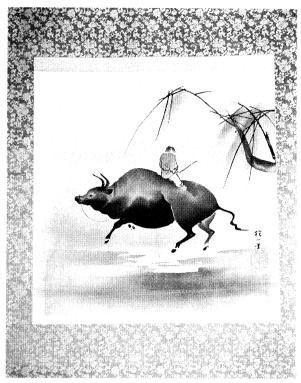
何と老婆親切なことか。 と同じです。手をかえ品をかえ、

ければなりません。 を防止する英知を働かしてゆかな は到底許されず、積極的に核戦争 るのも真理だなどと傍観すること えていえば、核戦争で世界が壊れ まの上に問題をとらえます。たと もっと身近な人間の実際の生きざ 哲学と大差ありません。禅では、 界の壊不壊を問題にするだけでは ところで、ただ真理と現象、世

ば本来の面目の発揮であります。 個人個人の英知は、禅的にいえ

> えて、おのれ自身の問題とすべき 則のテーマは、私たちの本来の面 目と日常生活というふうに置きか ですから、真理と世界というこの 食事でも仕事でも坐禅でも、

す。もって肝に銘じましょう。 を行うことは、そのまま「本来面 禅師は、正しい作法によって洗面 どありはしない。たとえば、道元 あって、そのほかに本来の面目な です。 蔵洗面)べき道理を説かれていま 目をして浄潔ならしむ」(正法眼 み、本来の面目が発揮されるので 正しく行ない行じられる当処にの



龍泉院蔵 「騎牛帰家」 の図

### 帰家」ではないでしょうか。 拝見しました。禅の書物にも出て を戴くひととき、司会者席から見 くる「十牛図」の中の「第六騎牛 て左前方の「床の間」にこの図を ご提唱が終ってくつろいだお茶

さが溢れています。 が違って、躰や眼玉に野性の逞し とした茶色の牛とは全然イメージ てお馴染みだった農家のおっとり 子供の頃荷車にのせて貰ったりし まっ黒で肥えた大牛は、私達が

におつき合い頂いていることだと 近かにあり、この会のご縁で気軽 います」と。騎牛帰家の人々は身 家に還って参禅会を楽しみにして ず仕事に没入しましたが、最近は お話。「現役時代には我を顧りみ くつろいでいるようです。 せんが、背中の感じがゆったりと います。むこう向きで顔が見えま さて、茶話会となり、諸先輩の 牛の尻の方に乗っている人物が

## 龍泉院の 「騎牛帰家」の図

### 千葉市 寺田 哲郎

かき立てるのでしょう。 楽の題材として、人々の想像力を 筆「柳下牧童図」とありました。 ました。酒井抱一(~一八二八) 良く似た図をみつけて、はっとし 国立博物館で龍泉院のと、とても 禅者列伝」が掲載された「禅の心 ていましたし、最近偶然に上野の ´読売新聞社刊) にも十牛図が載っ この家路を辿る構図は、絵や音 今日の業を遂し終えて 昨年末、 椎名老師執筆の「近代

\* 龍泉院の十牛図は、第二九世 豊洲大由和尚(昭和十年没) を表装仕立てたものです。 の羽織裏地に描かれていた絵



い、お茶とお菓子を戴きます。

そういえば此の頃、黒牛は家に

このところ久しく見えません。 帰り着いてしまったのでしょうか、

いざや帰らん ふるさと

〔新世界交響曲の「家路」より)

# **八雄寺での一泊参禅**

### る路をバスで向いました。車中、 した。梅雨入り第一日の小雨けぶ 五名による一泊参禅が行なわれま 両日、栃木県那須郡黒羽町にある 黒羽山大雄寺において、参加者二 平成元年六月一〇日、一一日の

大雄寺 -泊参禅参加者 -同(H 1 • 6 •11)

饭 Ź 1

### 加

下村忠男、杉浦上太郎、添田昌弘、 沢村国勝、四宮清二、清水利一、 北岡やすえ、佐藤征志、佐藤初恵、 小川真澄、 五十嵐嗣郎、 小畑節郎、 石井勇、井之輪進、 加藤健之、

> 中嶋南州男、原力三郎、三町勲、 染谷はる、高野千代子、寺田哲郎 宮田哲男、宮原惇、森岡俊雄、安 (以上二五名)

> > たしました。 ぎながら、石段を登り一同参詣い りでしょうか。途中、 第四回目となった一泊参禅のゆと 表があり、和気藹藹の雰囲気は、 等々、それぞれに思いをこめた発 とお酒の有り難さが判るのではな 戯してみたい、と意気軒昂。 廻されたマイクでは、 立ち寄り、天を突く杉の大木を抑 (高峰顕日禅師)開山の雲巌寺に て参加します、と今から舌つづみ。 いか、と我慢の覚悟。 体になる気概を持って、坐禅を遊 はないと気付かされた。天地と一 道さまは、人間のためにあるので お寺の精進料理に期待をこめ 休肝日となる坐禅会は、きっ 起きたら雨だった。でもお天

参禅の日課がはじまりました。 第一日 六月一〇日(土) 大雄寺では、次の差定により、

> 開夜 開講式 入 薬石準備 禅寺心得 浴 石 午後九時 午後八時 午後七時 午後六時 午後五時 午後四時 午後四時 十分

第二日 六月一一日(日) 点 坐 法坐小作 朝 振 暁 話禅食務 天 鈴 午前十時 午前九時十分 午前八時三十分 午前七時 午前六時 午前五時四十分 午前五時 午前四時三十分

には、心より感謝申し上げます。 られません。この計画の陰でご尽 おいしかった精進料理の味は忘れ そして宮田、佐藤両幹事、ならび に改めて感謝いたしますと共に、 に副住職の、心温まるお心ずかい 山いたしました。倉澤老師ならび に写真を担当下さいました中嶋様 力をいただいた椎名老師と小畑様、 こうして午後一時、一同無事下 正

佛国国師

# 自然と一期一会

## 我孫子市

親近感をおぼえるのです。怒る時 との中に大変人間性があり、大変 だからであろうか、自然であるこ ないだろうか。 時には笑う。これが自然なのでは ものが無視されるような気がする。 その中では人間性と言ったような には怒り、 てしまい、画一化されてしまう。 コンピューター化が進むにつれ 物事の処理がロジカルになっ 泣く時には泣き、笑う

そこでは、北きつねが自然の中に 本能なのであろうか。 抜くために自然から教え込まれた れは、動物達が厳しい自然を生き 為に保存してしまうのである。こ まり満腹している時には、明日の その餌を土の中に埋めて終う。つ 放牧されている。餌を与えると、 道を旅行した。北見から層雲峡に 行く途中に北きつね牧場がある。 今年の春、休暇を利用して北海

て保存する。寒冷地では、そのま くために、その実を土の中に埋め がやってきて、厳しい冬を生き抜 ま地面に放置されているどんぐり どんぐりの木でどんぐりが実っ その実が地面に落ちる。動物

> 関係なく、互いに自然の因果関係 動しているのである。 に結ばれながら、誕生し生存し活 期待とか報酬とかそんなものには の木として育つのである。自然は は、新しい芽が出てきてどんぐり は死んでしまう。しかし、土の中 に埋められて食べ残された実から

> > てみよう。

の通じ合う出会いがあるのではな りのない裸の会話があり本当に心 持った人間対人間の何等わだかま ない、人と人の純粋な出会いなの とかの先入観にとらわれることの いだろうか。 である。そこには、この世に生を 会いである。つまり前歴とか身分 一期一会とは人と人の自然の出

然でないものが、心のどこかに存 欲望とか利得とかの汚らわしく自 の持っている言葉の内容の深さに 変感銘を受けた。また、一期一会 「一期一会」のお話しに、 れた。これまで私が理解していた の講話があった。その講話の中の の一泊参禅会において、倉澤老師 ついて、私は認識を新たにさせら この度、那須の羽黒山大雄寺で |期一会」には、何か期待とか 私は大

> 別れが「一期一会」ではないだろ 人との出会い、自然な人と人との 在していたのである。自然な人と

にしよう。 広い意味での自然な生き方をし 本当の意味での一 期一会を大切

いて大変感謝しています。 人生における大変貴重なものを戴 んとの朝夕の出会いの中で、私は 大切にされる倉澤老師や副住職さ 雄寺の素朴な雰囲気、一期一会を 約六百年の歴史をもつ羽黒山大



大雄寺への参道

## 噛みしめながら

船橋市 北岡やすえ

思いやりを忘れることはできませ 厚く御礼申し上げます。 降りから、お寺での行事の一つ一 とても参加できるとは思ってもい 大切な紙面をお借りして、改めて ん。本当に有難うございました。 つに、皆々様からいただいた温い せていただきました。バスの乗り いお誘いに、厚かましくも参加さ て見ましょうよ、大丈夫」との強 ませんでした。そんな私に、「行っ と同じような坐禅が出来ないため たとき、足が不自由な私は、皆様 一泊参禅会のお勧めをいただい

ら、お釈迦様のお国で、どうして そんなことがあるのか分からない り、そして、それを処理する人達 いる態度です。お聞きしていなが の事務的で当りまえのこととして でも心に残りましたことは、イン 一夜明ければ路上での餓死者があ ドでは餓死する人々の多い国で、 せん。御住職様のお話で、いつま は言葉では言い表すことはできま 禅堂に入堂させていただいた感動 お寺でした。生まれて初めて、坐 の古色豊かな荘厳なたたずまいの 黒羽山大雄寺は、総かや葺屋根

がら感謝の毎日を送っております。 今、ここに生かさせていただいて 淋しさが広がりました。そして、 かと、幸せをしみじみ噛みしめな いる私は、何て幸せ者であること

黒羽山大雄寺に於ける一泊参禅会 に参加いたしました。 平成元年六月一〇日、一一日を

名老師に教えていただきました。 る愚工には、剣禅一如ならぬ鍛禅 坐禅は、愚工にとっては、夢のま ないし、動くし、本職の格調高い す。姿勢は悪いし、呼吸は整って で坐ろうが変らない様な気がしま の如き成ってない坐禅では、どこ か、本堂で行うかの差です。愚工 ませんでした。坐禅堂に於て坐る た夢であります。刀工が職業であ 一如になりたいものです。之も椎 大雄寺では、最後の禅講に、御 坐禅は、宗派が同じなので変り

> 説明申し上げます。 来た方に刀でも打って見ながら御 ん。誰れでも、愚工の所に遊びに ないと書いたぐらいでは判りませ 書けとのお話ですが、実際に刀が



大雄寺の坐禅堂で

## 中川先生、テレビで講演

二先生には、去る一〇月三日夕刻 病院顧問で著述も多い方です。 科を創設されました。現在は富里 州大学医学部に日本最初の心療内 はかって池見酉次郎博士と共に九 てわかり易く話されました。先生 自らガンを克服された体験を通し のテレビで、心身医療の重要性を 当参禅会員の医学博士・中川俊

るのですからあまり変な姿も見せ

です。 のですが、つい最近、御老師より、 のを一つ買って、居間においたの 三尊仏をいただき仏壇まがいのも 私の処は、仏壇が今迄なかった

やかな感じです。 沢村様、石井様、どなた様も実に 良く掃除と整理が出来ていてさわ 龍泉院様、加葉山様、最乗寺様、

ともないことも出来ませんので、 たのですが、この居間では変なかっ 少しは片付けるようになりました。 るはでちらかし放題でした。 あるわ雑誌はあるは、茶わんはあ たままで全て間に合う程、新聞は こうをしてごろごろころがってい それから以前はだらしのないかっ それが仏前ですのであまりみっ

きりするのですが、おそれ多い事 しています。そうすると気持がすっ 掛ける時には礼拝して行くように られません。 忘れることが多いのですが、出

刀の進歩、退歩について編集子が

最後に、應永年代を境にした日本

営の才能が必要でありましょう。

さいました。寺の様式である室町 経営について、御苦心を話して下 住職が御講義下さいました。寺の

時代の文化財を残すとなると、経

# 三尊仏を戴いて変ったこと

でしょう。

それにひきかえ私の処はすわっ

こうが出来なくなりました。 なにしろ承陽大師に見られてい

> しまつをしなければならないこと せん仏家の調度をお借りして身の ながらつい忘れてしまいます。しょ

柏市

下 村

ーマチのたぐいで、悪いことばか りしているむくいでしょうか。 血が流れます。これは神経痛かリュ に、足のうらに一、二秒程あつい 今も三尊仏の前で書いているの 最近、昼間仕事をしている時間

## 成道会のご案内

たかいような気がします。 ですが、なんとなく明るく、

会下さいますよう、ご案内申し上 す。会員の皆様にはふるってご参 な要領にて成道会を奉行いたしま 釈尊成道を讃え本年も右のよう 内容 坐禅・法要・法話・点心 龍泉院第七回成道会 一二月十日(日)午前九時



### 知 足 常

# わが人生を顧みて思うこと-

## 正

年時代は比較的平穏に育った。そ 願し、自分なりに精進を続けている。 れる老人として終りたいものだと念 余されたりしないで、程々に愛さ ば、大それたことは出来ようもな れて、生かされていることであれ た。何れにしても、大自然に支えら と、考えさせられる日が多くなっ いが、唯、余り嫌がられたり、持て 雪深い城下町に生れて、その少 私も既に人生八十年の峠を越え 余生を如何に生くべきかなど

忙しかった。 た。私の担当した水力の電源開発 けて、電力の需要は急激に増加し 興時代から、戦後の復興時代にか も、之に呼応して終始活況を呈し 社に就職した。戦前の各種工業勃 を行く電気工学を学んで、電力会 して、当時としては、時代の先端

であったと思う。 生涯忘れられぬ生甲斐のある日々 代は、多くの国家的遺産とともに、 たが、三四年に亘る電力の現役時 時には本支店に戻って総括もし 昭和二〇年の終戦を境にして、

戦中は社会的にも極めて波乱の多

ればならなかった。 命ぜられた目的地に馳せ参じなけ 今生の別れを惜しむ束の間もなく、 戦争中には二回、例の赤紙一枚の 身の予備将校だったので、当然の 召集令状を受け、妻子や親兄弟と 義勇公に奉ずべき身分でもあった。 こと乍ら、一旦緩急ある場合は、 い時代だった。私は幹部候補生出

して通算四ケ年の兵役に服して、 云わば海の特攻隊であった。かく るを得なかった。その艇長要員で、 分散して、兵員や弾薬を輸送せざ 造した、小型高速輸送艇により、 であった。やむなくベニヤ板で急 やられて、その任務の遂行が困難 を出ると、敵の航空機や潜水艦に けた。当時大型輸送船は瀬戸内海 集され、似島で秘密裡に特訓を受 目は昭和一八年に、特殊艇要員と 動揺は仲々に押え切れなかった。 して、宇品の船舶輸送司令部に召 ソ連の国境警備に出動した。二回 一回目は昭和一六年に、北朝鮮と 戦を迎えた。 日頃覚悟はしていたが、内心の

戦友の多くは不幸にも、大陸や

る。 延びた。今更乍らその幸運を痛感 し、自然と襟を正して暮らしてい に紙一重で、その難を逃れて生き 任地での廣島の原爆にも、ほんと いる。之に引き換え私は、 最後の

南方の激戦地に転じて戦没されて

している。 くしている。戦後には柏市で、一 私も応召中に二人の幼児と弟を亡 人息子の長男が二児を残して他界 然し乍ら、この幸運とは裏腹に、

そのものである。 ない。仏教に言われる、諸行無常 馬である。その幸、不幸は定まら 顧みても悲喜交々であり、塞翁が 誠に人生は、私個人の八〇年を

た、我が国では、過去に於ける如 平和憲法によって戦争を放棄し しがらみによって、

> 精進し、信頼する御老師や諸先達 なって、成道など出来よう筈もな ない。追いつめられたこの年令に だから、仏法僧の三法に帰依して、 たいと念願している。 の風貌に接し、参禅にこれつとめ いが、龍泉院参禅会の皆様と共に 心の平安を求めたいことには変り 老病死の運命がつきまとっている。 ない。然し戦争の無い人生が必し その運命を左右されることが無く も幸せでは無い。人生には必ず、 なったことは、幸と云わざるを得

とある。 枕元の床間にかけられた掛軸に、 知足常楽 能忍自安」

座右の銘として、常々、反省しな かれているが、私共の日常生活に 龍泉院さんの本堂の入口にも書



龍泉院の秋

## 龍泉院参禅会簡介

までに来山のこと) - ・ 毎月第四日曜午前九時より(初参加の方は八時半

坐 禅 止 静 鐘 三声 坐禅

( ) 道 二声 経行

義 木版三通 開經偈を唱えて『正法眼蔵』の提唱を放 禅 鐘 一声 放禅

講

聞く

講師 龍泉院住職椎名宏雄老師

昭和六三年八月より「身心学道」の巻を提唱中

、座 談 自己紹介の後、茶を喫し座談

正午解散

一、参加資格(年令、性別を問わず、どなたでも参加できます。

、会費 無料

一、成道会坐禅

月例参禅会の他に毎年一二月の第一あるいは第二

日曜。(本年は一二月一〇日)

釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要の後、法話を聴

聞、点心(昼食)を共にする。

## 沼南雑記

四月二三日 二七名

堀り。 又、恒例により裏山にて「筍」特に初心者への指導を行なう。

五月二八日三〇名

一泊参禅 二五名.......(神戸 正)

が<br />
栃木県黒羽町 大雄寺<br />
「田名だいおうじ

▼椎名老師は『明珠』創刊号に

事 宮田哲男

六月二五日 二五名 「高野千代子)

七月二三日 二五名

となる。(杉浦上太郎)巻の月より提唱は「身心学道」巻

八月二七日 二九名

九月二四日 二六名 (寺田哲朗)

(藤原・

諸兄姉の御支援は言うに及ばず、を数えることになりました。会員を発行以来、本号を以って一○号回発行で、昭和六○年四月第一号回発行で、昭和六○年四月第一号

▼只今、病後御静養中の高間先達 ▼只今、病後御静養中の高間先達 は「一年をただ平たく並べるので なん、薄紙のような一年でも積み なが、何とか続けられたのもこの なが、何とか続けられたのもこの なが、何とか続けられたのもしれま

ことでしょうか。皆様と共に「只 期的な形で実施されるようになっ 管打坐」の継続を念ずる次第です。 る。この空間は怠惰な私にどれだ て、毎月第四日曜は何時でも坐れ まったかもしれない。只門を開い もしれない。又すっかり止めてし 他の坐禅道場で坐っておられるか められた方も多い。この方々も又 れた方もいるが、大方は一度で止 す。その中には長く坐禅を続けら 足より二○周年の節目にも当りま かれている。明平成二年はその発 たのは昭和四六年七月二五日と書 寄せておられ、 龍泉院参禅会の足跡」の一文を **/安心を与え、勇気づけてくれた** 毎月第四日曜に定

印《刷厂简田印刷株式会社》柏市高田1116-45 含0471(43)3131発 行/天徳 山 龍 泉 院一千 葉 県 沼 南 町 泉 81 含0471(91)1609